

性別の3要素からみたジェンダー・アイデンティティと 自己肯定意識の状態との関連

Relationship between gender-identity and state of positive self-consciousness
— from a viewpoint of gender defined as the co-existence of the three affecting
factors : biological sex, gender roles, and sex of mind —

長谷川 悠乃
大田区子ども家庭支援センター
Yuno Hasegawa
Ota City child and Family
Support Center

松崎 くみ子
跡見学園女子大学
文学部臨床心理学科
Kumiko Matsuzaki
Department of Clinical Psychology,
Faculty of Letters, Atomi University

要 約

本研究では、社会変動性のない、主観的な自分の認識する性別が他者の認識する社会的な自分の性別と一致するという感覚をジェンダー・アイデンティティとして捉えるジェンダー・アイデンティティ尺度(以後、GIS;佐々木, 2007)を用い、性別の3要素(心の性別・社会的な性別・身体の性別)という観点から、ジェンダー・アイデンティティと自己肯定意識の状態との関連を検討した。ジェンダー・アイデンティティは自己概念の1つと考えられる。自己概念の形成には、他者からの評価や承認による気づきが影響要因と示唆される。多くの人は生まれたときに割り当てられた性別を疑いなく自分の性別と認識するが、生まれたときに割り当てられた性別に疑問を抱く人もいる。彼らはトランスジェンダーと呼ばれ、本研究で取り上げる性別の3要素は一致していないと考えられる。マイノリティの自尊心は、低い場合と高い場合が考えられるため、トランスジェンダーの自己肯定意識の状態を検討した。

性別の3要素が一致していると考えられる大学生(一般群:168名)と一致していないと考えられるトランスジェンダー(TG群:10名)を対象に質問紙調査を行い、比較検討した。使用尺度は、GIS、自己肯定意識尺度(平石, 1990)である。

ジェンダー・アイデンティティの感覚は、総合的に一般群のほうがトランスジェンダー群(TG群)より高いことが示された。しかし、自己肯定意識は(特に、自己を肯定的に捉えることについて)、TG群が有意に高い得点を示した部分が明らかになった。

総合的な心の性別の状態が影響を及ぼしているのではなく、(過去の心の性別の状態は関係なく)現在の心の性別の状態が安定していることが影響していることが推察された。

【Key Word】ジェンダー・アイデンティティ, 自己肯定意識, トランスジェンダー

I はじめに

これまでの研究において、ジェンダー・アイデンティティという概念は、はっきりとは定まっておらず、社会的性役割に沿ったジェンダー・アイデンティティ研究が中心であった。しかし、性役割は時代によって異なるため、現代社会に合う尺度とは言えないものも多い。BSRI(Bem Sex-Role Inventory; Bem, 1974)は形容(動)詞による性役割尺度で女性性を測定し(東, 2002など), MMPI(ミネソタ多面人格目録; Minnesota Multiphasic Personality Inventory, 1943)の下位尺度のひとつであるmf尺度(男性性・女性性尺度)は具体的な性役割を用いてジェンダー・アイデンティティを測定する(秋山ら, 1986など)。土肥(1996)は、自己の性(sexとgenderの両方)の受容や父母との同一化, 異性との親密性をジェンダー・アイデンティティの下位概念に仮定した尺度を作成した。

佐々木(2007)は、ジェンダー・アイデンティティを“斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が、周りから見られている社会的な自分の性別と一致するという感覚”として捉え、新たな尺度を作成した。佐々木の作成したジェンダー・アイデンティティ尺度(Gender Identity Scale; 以下, GIS)は、以下の3点が特徴である。①具体的な性役割で測定せず、自己の性別のありようを抽象的に問うことができ、②身体的性別と性自認が同じでなくとも、同性

愛指向を持っていても測定が可能である。ジェンダー・アイデンティティを性別に対する統一性, 一貫性, 持続性という側面から捉える必要性を示唆し、③Eriksonのアイデンティティ感覚という概念を取り入れた。

本研究では時代・社会変動性のある性役割を元とするジェンダー・アイデンティティ尺度を使用せず、主観的な自分の認識する性別が他者の認識する自分の性別と一致する感覚をジェンダー・アイデンティティとして捉える、GISを用いた。また、性別の3要素という観点から、ジェンダー・アイデンティティと自己肯定意識の状態との関連を検討していく。性別の3要素とは、①身体の性別(生物学的性別, セックス), ②社会的な性別, ③心の性別である。本研究では、自己認識している性別と社会的に良しとされる性別(社会的性役割に即した性別, 学校や会社に公表する性別など)は、必ずしも同一のものを指すと限らないという観点から、性別の3要素が一致している人と一致していないであろうトランスジェンダー¹の人の自己肯定意識の状態を検討する。

II 問題

私たちは自己の様々な側面に関する自己評価の結果、自己に関する知識やイメージである自己概念を持ち、様々な社会的な経験を積みながら、自己概念を蓄積させ、構

¹ 「性同一性障害」という言葉は医学用語である。トランスジェンダーは、医学的な定義におさまらない、当事者の多様な実態を表現する言葉。「性別について特に苦痛や違和感を感じていない」が、出生時に割り当てられた性別とは異なる自己認識を持っていて、体と異なる性別を生きようとする人など。身体的にも社会的にも、完全に性別の移行を望む人をトランスセクシュアル(TS)と呼ぶこともあり、それ以外の「身体までは変えるつもりはないが、異なる性で生きようとする人」を指して、狭い意味でトランスジェンダー(TG)と呼ぶこともある。(野宮ら, 2003)

本研究では、広義の心の性別と身体的性別が一致していない人全般を、トランスジェンダーと呼ぶこととする。

造化していく。子どもの自己概念の形成は、①親・友・教師への同一視に基づくモデリング、②役割遂行などのさまざまな経験による自己の気づき、③他者からの評価や承認による気づきが影響要因となっている(遠藤ら, 1992)。ジェンダー・アイデンティティも自己概念の1つと考えられ、自己肯定意識の状態との関連が推測される。

富重ら(1999)による青年期男女の身体満足度と劣等感・自己受容感に関する研究では、男女とも身体的自己に関する劣等感や自己受容感が身体満足度と密接に関連していることを示している。佐々木(2007)は、ジェンダー・アイデンティティと自尊心の関係について、性同一性障害ではない男性以外(性同一性障害の人および、性同一性障害ではない女性)に相関が見られ、他者や社会にどう見られるか、どう受け入れられるかのみが自尊心に関係するのではないかと推察している。遠藤ら(1992)によれば、自尊感情は「社会とのかかわりの中で特定の役割、価値観の達成を通して獲得される自己価値についての確信」と定義され、自己評価をどの程度受容するかに応じて規定される。自尊感情は自己や自我同一性の問題を考慮するにあたり重要な役割を果たしていると考えられる。以上の研究から、自己認識や自己評価とジェンダー・アイデンティティの状態には何らかの関係が考えられる。

また、本研究ではジェンダー・アイデンティティと自己肯定意識の状態との関係について検討するため、性別の3要素が一致していると考えられる大学生と一致してい

ないトランスジェンダーの人を対象として研究を進める。性別の3要素が一致している人は大多数であるため、それらの一致していないトランスジェンダーはマイノリティと考えられる。一般にマイノリティは差別の対象になることが多く、対人的にも経済的にも社会の中で周辺的な地位に甘んじている(石丸, 2004)。マイノリティの自尊心は低いはずであると予測する理論が数多く存在する(Crocker&Major, 1989)。しかし、Major(1989)によれば、スティグマ²には自己防衛的特性があり、スティグマを持つ人は自尊心を守るような方略をとることもできる。マイノリティの自尊心は、低い場合と高い場合が考えられる。トランスジェンダーの人の自己肯定意識は、どのような状態かについて検討していく。

Ⅲ 仮説

第一に、ジェンダー・アイデンティティの状態によって、自己肯定意識の状態は必ずしも左右されないということを仮説Iとする。

まず、性別の3要素が一致している群(大学生)と一致していない群(トランスジェンダー)では、自己肯定意識はどのように関連しているかを検討していく。マイノリティの自尊心は低いはずであると予測する理論が数多く存在する(Crocker&Major, 1989)。その一方で、Major(1989)は、マイノリティであっても自尊心が低くない場合が存在することを示唆した。したがって、性別の3要素が一致していないことが、必ずしも自己肯定意識

² ある個人を他人から区別する個人的な特徴で、しかも物理的、心理的、社会的な不利をもたらすような特徴を指している。

の低さに結びつかないということを仮説Ⅰの①とした。

また、総合的なジェンダー・アイデンティティの感覚の強弱が、自己肯定意識とどのように関連しているかを検討することとした。そのため、GISにおける「心の性別因子」と「社会的な性別因子」の得点の高い群と低い群とを比較することとした。したがって、総合的な自分の性別へのアイデンティティの感覚が強いことが、必ずしも自己肯定意識の高さに結びつかないということを仮説Ⅰの②とした。

第二に、心の性別の安定性に注目したい。古橋(2008)は、性別を自己(「私」)そのものに内在するものと考えることがトランスジェンダーを理解する上で重要であると考えている。心の性別の安定性が自己肯定意識にどのような影響を与えているのかを検討していく。そこで、GISを心の性別と社会的な性別という次元で捉えなおし、性別の3要素の状態が異なる群を比較し、ジェンダー・アイデンティティの状態と自己肯定意識の状態との関連を検討する。したがって、性別の3要素の一致性よりも心の性別の一貫性が、自己肯定意識の高さに関係するということを仮説Ⅱとした。

第三に、仮説Ⅱはトランスジェンダーにおいても同様の傾向が見られるということを仮説Ⅲとした。

Ⅳ 方法

1. 調査対象

調査対象者は、A私立大学の大学生男女合計181名(以下、一般群)、トランスジェンダー10名(以下、TG群)であった。ここでのトランスジェンダーとは、自己報告によるものである。

本研究の目的は性別の3要素の一致・不一致により、ジェンダー・アイデンティティと自己肯定意識の状態について検討するためであるため、一般群とTG群に分ける必要がある。佐々木(2007)も、GISを作成する際、性同一性障害を持つ人々はジェンダー・アイデンティティがもっとも不全状態にあると考え、構成概念妥当性の検討に適しているとし対象としている。性同一性障害とは、出生時に割り当てられた身体の性別に対する違和感を抱え、クリニックなどで診断名を与えられている人を指すが、本研究では、より広い概念を指す(性同一性障害と診断を受けていなくとも自分自身で性別違和を訴える人も含む)言葉であるトランスジェンダーを対象とした。

なお、TG群の性別の3要素の状態は、表1のとおり、6パターンであった。秘密保持を守るため、人数の割り当てについては明記しない。

表1 トランスジェンダー対象者の性別の3要素の状態

	身体の性別	社会的な性別	心の性別
1	女性	女性	両性またはどちらでもない性
2	女性	女性	男性
3	女性	男性	男性
4	女性	男性	両性またはどちらでもない性
5	女性	両性またはどちらでもない性	男性
6	男性	男性	両性またはどちらでもない性

2. 質問紙

本調査の質問紙は、1)フェイスシート、2)GIS、3)自己肯定意識尺度で構成されている。

1)フェイスシート

フェイスシートでは、本調査の目的を説明し、学年と年齢のほか、性別の3要素についての説明文を入れ、記入を求めた。本研究では、性自認と心の性別を異なるものとして定義している。そのため、性別の3要素(身体の性別・社会的な性別・心の性別)を明確に分け、回答してもらう必要性があった。

身体の性別を“多くの場合、性器によって決められる性別”，社会的な性別を“学校や会社などで公表している性別”，心の性別を“自分で受け入れられるしっくりくる性別”と教示した。身体の性別の選択肢は、1. 男性、2. 女性 3. その他とし、その他の場合はその詳細を記入してもらうこととした。社会的な性別・心の性別では1. 男性、2. 女性、3. 両性またはどちらでもない性 から選択してもらった。

トランスジェンダー当事者へのフェイスシートでは、身体の性別部分の教示文を“生まれたときに割り当てられた性別”と変更した。なぜなら、トランスジェンダーの中には性別適合手術を受け、戸籍上の性別を変更している人がいる可能性があるからである。

2)GIS(佐々木, 2007)

心の性別と社会的な性別の状態を測る尺度である。

佐々木の作成したGISでは、下位概念として、以下の4因子をあげている。①自己の性別が一貫しているという感覚を指す

“自己一貫的性同一性”，②自己の性別が他者の思う性別と一致しているという感覚を指す“他者一致的性同一性”，③自己の性別での展望性が認識できているという感覚を指す“展望的性同一性”，④自己の性別が社会とつながりを持っていてという感覚を指す“社会現実的性同一性”である。因子分析の結果、①と②の高次元因子を“一致一貫的性同一性”，③と④の高次元因子を“現実展望的性同一性”と分類した。また、本研究では、性別の3要素からジェンダー・アイデンティティの状態について検討するため、①と③を合わせたものを「心の性別因子」、②と④を合わせたものを「社会的な性別因子」と呼ぶ(表2)。

GISでは、1)身体の性別にかかわらず、性自認を自分で選ぶことができ、2)性指向(同性愛・異性愛・両性愛)を問う質問がないことが特徴である。そのためトランスジェンダーにおいても回答可能であり、また、回答者の性指向を問わずにジェンダー・アイデンティティの感覚の強弱について測定することが可能である。

3)自己肯定意識尺度(平石, 1990)

自己肯定意識尺度(平石, 1990)は、自己意識における自己肯定性次元の個人差を「対自己領域」と「対他者領域」に2分して測定する尺度である。「対自己領域」は「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」, 「対他者領域」は「自己閉鎖性・人間不信」「自己表明・対人的積極性」「被評価意識・対人緊張」の下位成分からなっている(表3)。

また、本尺度は、平石(1993)によると下位成分ごとの年齢による大きな得点差が見

表2 GIS(佐々木, 2007)における下位因子分類および質問項目, ならびに本研究における分類 GIS(佐々木, 2007)の分類

<p>現実展望的性同一性</p>	<p>展望的性同一性 自分が女性(男性)として望んでいることがはっきりしている。 自分が女性(男性)としてどうなりたいのかがはっきりしている。 自分が女性(男性)としてすべきことがはっきりしている。</p> <p>社会現実的性同一性 現実の社会の中で、女性(男性)として自分らしい生き方ができると思う。 現実社会の中で、女性(男性)として自分らしい生活を送れる自信がある。 現実社会の中で、女性(男性)として自分の可能性を十分に実現できると思う。 *女性(男性)として自分らしく生きてゆくことは、現実社会の中では難しいだろうと思う。</p>
<p>一致一貫的性同一性</p>	<p>自己一貫的性同一性 *過去において、自分の性別に自信が持てなくなったことがある。 *過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。 *いつからか自分の性別が分からなくなってしまったような気がする。 *今のままでは次第に自分の性別が分からなくなっていくような気がする。 *自分の性別に迷いを感じることもある。</p> <p>他者一致的性同一性 *人に見られている自分お性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。 *女性(男性)としての自分は、人には理解されないだろう。 *人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。</p>

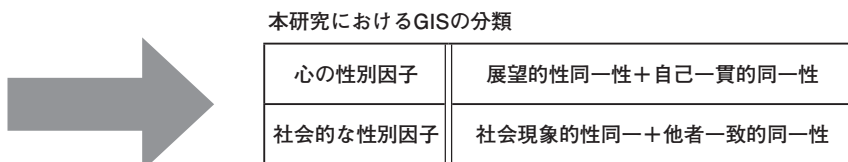


表3 自己肯定意識尺度(平石, 1990)の項目内容

<p>対自己領域</p> <p>自己受容 自分なりの個性を大切にしている 私には私なりの人生があっていいと思う 自分の良いところも悪いところもあるままに認めることができる 自分の個性を素直に受け入れている</p> <p>自己実現的態度 自分の夢をかなえようと意欲に燃えている 情熱を持って何かに取り組んでいる 前向きの姿勢で物事に取り組んでいる 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている 張り合いがあり、やる気が出ている 本当に自分のやりたいことが何なのか分からない(*) 自分には目標というものがない(*)</p> <hr/> <p>充実感 生活がすごく楽しいと感じる わだかまりがなく、スカッとしている 充実感を感じる 精神的に楽な気分である 自分の好きなことがやれていると思える 自分はのびのびと生きていると感じる 満足感がもてない(*) 心から楽しとは思える日がない(*)</p>

(*)は逆転項目

得点が高ければ高いほど、肯定的な傾向を示すように得点を割り当ててある

表3(続き) 自己肯定意識尺度(平石, 1990)の項目内容

対他者領域
自己閉鎖性・人間不信
他人との間に壁をつくっている
人間関係をわずらわしと感じる
自分は他人に対して心を閉ざしているような気がする
自分はひとりぼっちだと感じる
私は人を信用していない
友だちと一緒にいてもどこかさびしく悲しい
友人と話していても全然通じないので絶望している
他人に対して好意的になれない
自己表明・対人的積極性
相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる
自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている
疑問だと感じたらそれを堂々といえる
友だちと真剣に話し合う
人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる
人前でもありのままの自分を出せる
自主的に友人にはなしかけていく
被評価意識・対人緊張
人から何か言われていないか、変な目でみられていないかと気にしている
人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている
自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる
他人に自分のイメージだけを印象づけようとしている
無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている
自分は他人よりおどっているかすぐれているかを気にしている
人に気をつかひすぎて疲れる

(*)は逆転項目

得点が高ければ高いほど、肯定的な傾向を示すように得点を割り当ててある

られない。したがって、一般群(168名, 18～24歳, 平均年齢19.03歳±1.140)とTG群(10名, 21～37歳, 平均年齢25.70歳±4.945)では年齢差があるが、支障がないと判断した。

自己肯定意識尺度は、「対自己領域」と「対他者領域」に分かれており、より多面的な検討が可能である。GISも心の性別と社会的な性別とに2分し検討することが可能であり、自己肯定意識尺度における「対自己領域」全体と「対他者領域」全体との関連を比較検討することが出来ると考えられる。そのため、「対自己領域」全体と「対他者領域」全体の各々の合計得点も算出している。

本研究での得点配分は、得点が高ければ

高いほど肯定的な傾向を示すように得点を割り当てた。よって、「自己閉鎖性・人間不信」の得点が高いことは自己閉鎖性が低く・人間不信ではないことを示し、「被評価意識・対人緊張」の得点が高いことは被評価意識が低く・対人緊張をしないことを示す。

3. 実施時期

個別自記式の質問紙調査を実施した。大学生を対象とした調査は2009年10月7日に実施した。トランスジェンダーを対象とした調査は2009年9月30日～11月7日までの期間に実施した。

4. 倫理的配慮

無記名であり、秘密保守の説明をフェイシートに明記した。

V 結果と考察

1. 分析1:ジェンダー・アイデンティティと自己肯定意識の状態との関連

1)GISと自己肯定意識尺度の相関

一般群においては、すべての因子間に相

関があったので、一般群ではジェンダー・アイデンティティと自己肯定意識との間には関連があるということが明らかになった(表4)。

表4 GISと自己肯定意識尺度間の相関係数(一般群 n=168, TG群 n=10)
一般群

	「自己受容」	「自己現実的態度」	「充実感」	「対自己領域」	「自己閉鎖性・人間不信」	「自己表明・対人の積極性」	「被評価意識・対人緊張」	「対他者領域」
心の性別因子	.26**	.27**	.45***	.42***	.41***	.20**	.22**	.37***
社会的な性別因子	.24**	.33**	.40***	.42***	.48***	.24**	.18*	.39***
GISの合計得点	.27***	.32**	.45***	.44***	.47***	.23**	.21**	.40***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

TG群

	「自己受容」	「自己現実的態度」	「充実感」	「対自己領域」	「自己閉鎖性・人間不信」	「自己表明・対人の積極性」	「被評価意識・対人緊張」	「対他者領域」
心の性別因子	-0.16	0.31	0.15	0.15	0.41	-0.04	0.50	0.43
社会的な性別因子	0.27	0.57	0.53	0.55	.66*	-0.26	.71*	0.55
GISの合計得点	0.09	0.49	0.39	0.41	0.60	-0.18	.67*	0.54

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

TG群においてはGISにおける「社会的な性別因子」と自己肯定意識尺度における「自己閉鎖性・人間不信」(点数が高いほど、この傾向が低いことを示す。)(r=0.66, p<.05), 「被評価意識・対人緊張」(点数が高いほど、この傾向が低いことを示す。)(r=0.71, p<.05), GISの合計得点と「被評価意識・対人緊張」(点数が高いほど、この傾向が低いことを示す。)(r=0.67, p<.05)に有意な正の相関が示された(表4)。つまり、「社会的な性別因子」が高得点であればあるほど、自己閉鎖的でなくなり、人間不信さが低減し、他者から見られているイメージなどを気にしすぎず、対人緊張も少なくなる。また、GISの合計得点が高得点であればあるほど、他者から見られているイメー

ジなどを気にしすぎず、対人緊張も少なくなる。

以上の結果から、一般群とTG群の間には、差があることが示された。また、ジェンダー・アイデンティティと自己肯定意識の間には、主にTG群において関係があることが明らかになった。

2)一般群とTG群の比較

(1)GIS得点について

TG群のGIS平均得点はすべて一般群より有意に低かった(図1・図2)。

「心の性別因子」の得点はTG群のほうが一般群よりも低い(t(176)=8.09, p<.001)という結果から、トランスジェンダーの人々は、生きていく中で自分の性別についてのアイデンティティの感覚が一貫してお

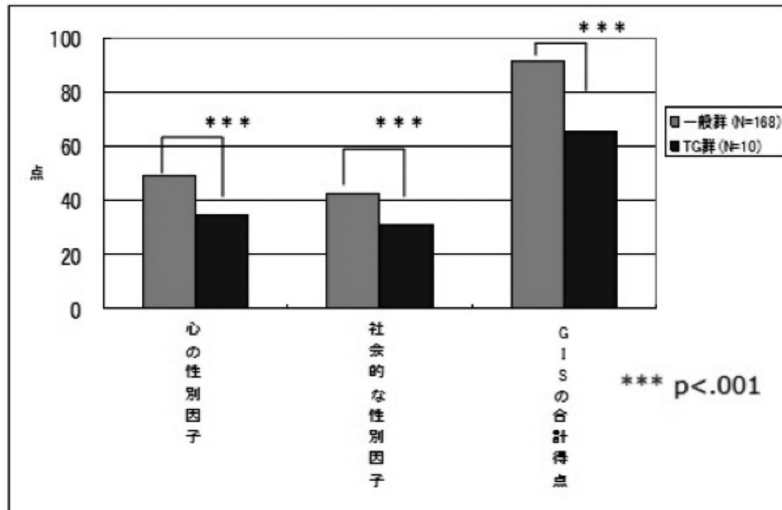


図1 一般群とTG群におけるGISの平均得点

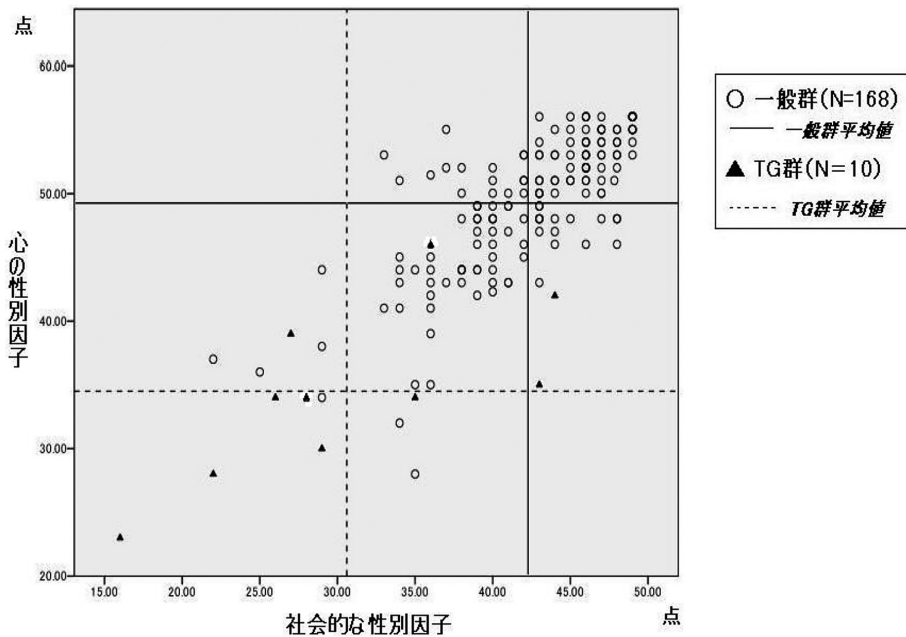


図2 一般群とTG群のGIS下位因子の得点

らず、揺らいだ状態にあることが分かる。また、「社会的な性別因子」の得点がTG群のほうが一般群よりも有意に低い($t(176) = 6.46, p < .001$)ことから、トランスジェンダーの人々は他者との関係や、社会の中における自分の存在についても、自分の性別

についての不安定さを感じていることが分かる。

(2) 自己肯定意識尺度得点について

「対他者領域」の「自己表明・対人的積極性」では、TG群のほうが有意に低く($t(176) = 4.35, p < .001$)、「対自己領域」の「自己現

「実的態度」については、TG群のほうが有意に高い($t(176) = 3.50, p < .01$)。「対自己領域」全体についても、TG群のほうが一般

群より有意に高い得点を示した($t(176) = 2.20, n.s.$)。(図3・図4)

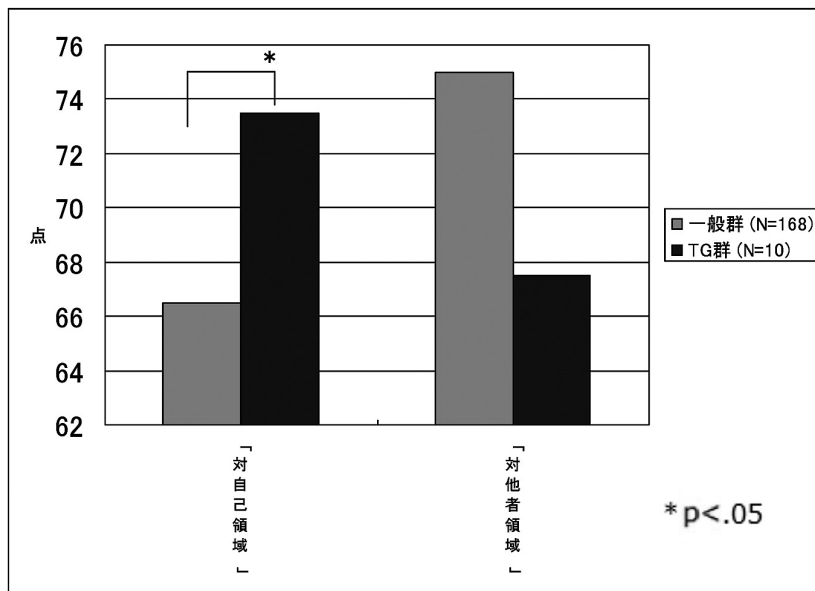


図3 一般群とTG群における自己肯定意識尺度の平均得点 — 「対他者領域」全体と「対自己領域」全体—

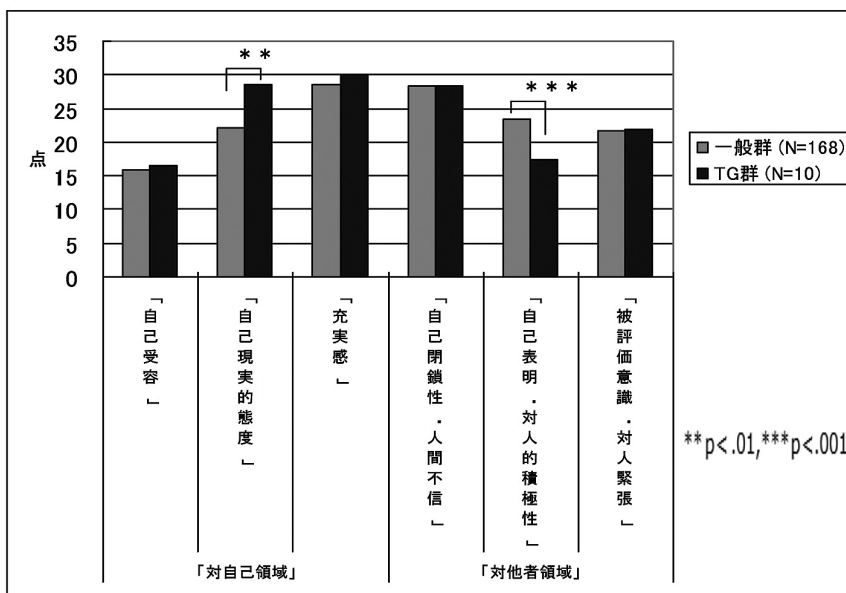


図4 一般群とTG群における自己肯定意識尺度の平均得点 — 自己肯定意識尺度下位成分—

以上の結果から、自分の性別に対する感覚が弱くとも、自分に対する肯定的な自己評価ができていているということがいえるだろ

う。性別の3要素が一致していないトランスジェンダーにおいても肯定的な自己評価が可能であり、「自己現実的態度」の得点が

TG群で高いこととの関連が推測される。

「自己表明・対人的積極性」(点数が高いほど、この傾向が低いことを示す。)について、一般群とTG群で有意な得点差が示されたことから、トランスジェンダーの人は、他者が自分の性別について詮索することを恐れ、他者に見られることを避け、自己表明することが難しいことが推測される。しかし、「自己閉鎖性・人間不信」(点数が高いほど、この傾向が低いことを示す。),「被評価意識・対人緊張」(点数が高いほど、この傾向が低いことを示す。)においては一般群との得点差はほぼないため、他者に対して全て消極的ではないことが示されている。トランスジェンダーの人は、周囲に自分について理解し、支えてくれている友達や恋人、家族の存在があるのかもしれない。また、自分自身の性別に対する違和感を抱えて、格闘しているからこそ、現実社会で頑張ろう、自分のやりたいことをやってやろうと(「自己現実的態度」)のTG群の得点の高さ)果敢に取り組んでいくのかもしれない。

3) ジェンダー・アイデンティティ高群(以下GI高群)とジェンダー・アイデンティティ低群(以下GI低群)の比較

(1) 一般群における比較

一般群では、GISの得点におけるパーセンタイルを用い50パーセンタイルを境にして高群・低群に分類した。「心の性別因子」は50点が50.6パーセンタイルとなっていたが、ヒストグラムを見てみると49点代と50点代の間に大きな落ち込みがあったため、49.99点以下と50点以上で分けた。「社会的な性別因子」は42点と43点の間に50パーセンタイルが存在するため、42.99以下と43点以上で分けることとした。よって、GI高群78名・GI低群58名で検討した。

自己肯定意識尺度については、「対自己領域」全体($t(134)=5.52, p<.001$)と「対他者領域」全体($t(134)=4.62, p<.001$)ともに、GI高群のほうがGI低群より有意に高い得点を示した。下位成分についても、「被評価意識・対人緊張」(点数が高いほど、この傾向が低いことを示す。)以外は全て、GI高群は、GI低群より有意に高い得点を示した($t(134)=1.73, n.s.$)。(図5・図6)

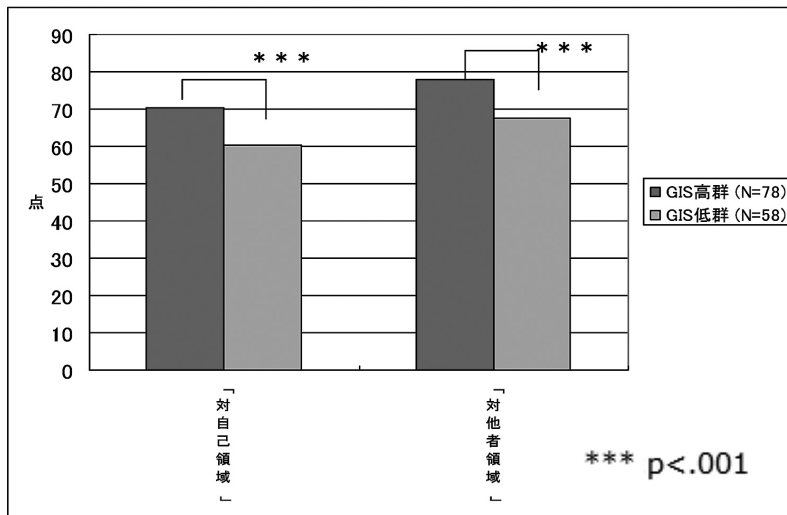


図5 一般群におけるGI高低群別自己肯定意識尺度の平均得点 — 「対他者領域」と「対自己領域」 —

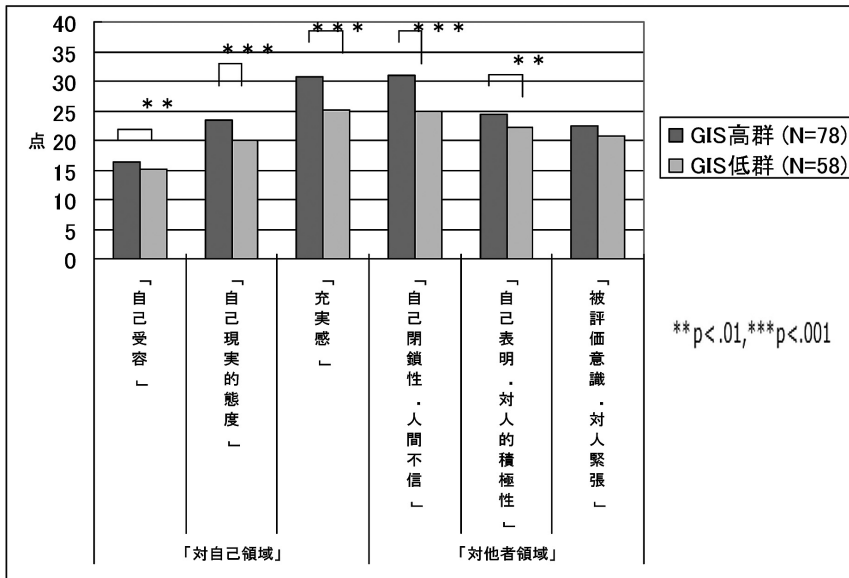


図6 一般群におけるGI高低群別自己肯定意識尺度の平均得点 —自己肯定意識尺度下位成分—

(2) TG群における比較

TG群では、GISの「心の性別因子」と「社会的な性別因子」、それぞれの平均値を境に高群と低群に分類した。よって、GI高群3名・GI低群5名で検討した。

自己肯定意識尺度については、「自己閉鎖性・人間不信」(点数が高いほど、この傾向が低いことを示す。)についてGI高群のほ

うがGI低群より有意に高い得点を示した($t(6) = 2.59, p < .05$)。しかし、その他の下位成分については有意な得点差は見られなかった。これは、GISの得点が一般群よりも有意に低い、TG群内で高・低群に2分割し、比較を行ったため、一般群のような結果が出なかったとも考えられる。(図7)

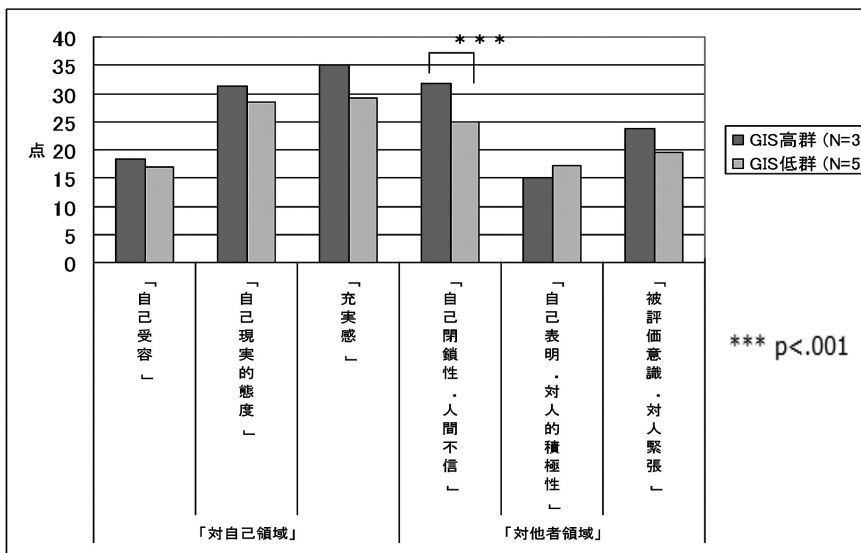


図7 TG群におけるGI高低群別自己肯定意識尺度の平均得点

(3) 一般群のGI低群とTG群の比較

一般群の中でもGISの得点が低い一般群のGI低群と、一般群と比較するとGISの得点の低いTG群では、自己肯定意識の状態はどのようになっているのかを検討するため、比較を行った。

両群共に、GISの平均得点が一般群のGI高群より低い得点であるが、TG群のほうが一般群のGI低群よりも全体的に低い得点を示した。

自己肯定意識尺度では、「自己表明・対人

的積極性」においては、一般群のGI低群のほうがTG群より有意に高い得点を示した($t(66) = 3.31, p < .01$)。しかし、「自己現実的態度」($t(66) = 4.61, p < .001$)、「充実感」($t(66) = 2.52, p < .05$)、「対自己領域」($t(66) = 3.86, p < .001$)については、TG群の方が一般群のGI低群より有意に高い得点を示した。一般群とTG群の比較時に比べ、さらに「充実感」についての有意差が示された。(図8・図9)

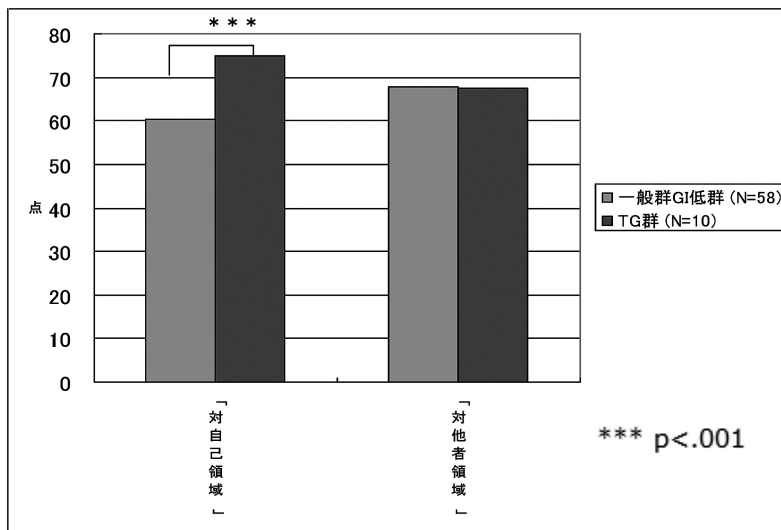


図8 一般群のGI低群とTG群における自己肯定意識尺度の平均得点 — 「対他者領域」全体と「対自己領域」全体—

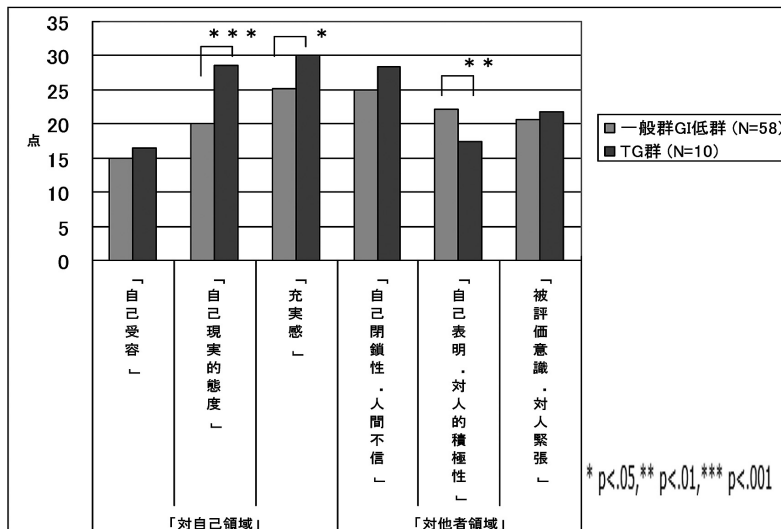


図9 一般群のGI低群とTG群における自己肯定意識尺度の平均得点 — 自己肯定意識尺度下位成分—

2. 分析2：GISの下位因子が自己肯定意識に及ぼす影響

1) GISの下位因子と自己肯定意識尺度の関係

さらに詳しく、ジェンダー・アイデン

ティティと自己肯定意識の状態との関係について検討するため、GISの下位因子の分類を佐々木(2007)の設定した元の4因子に戻して、分析した(表5)。

表5 GIS(佐々木, 2007)における分類と本研究におけるGISの下位因子名の対応

GIS(佐々木, 2007)の分類		本研究における下位因子名
現実展望的性同一性	展望的性同一性 自分が女性(男性)として望んでいることがはっきりしている。 自分が女性(男性)としてどうなりたいかははっきりしている。 自分が女性(男性)としてすべきことがはっきりしている。	現在の心の性別因子
	社会現実的性同一性 現実の社会の中で、女性(男性)として自分らしい生き方ができると思う。 現実社会の中で、女性(男性)として自分らしい生活を送れる自信がある。 現実社会の中で、女性(男性)として自分の可能性を十分に実現できると思う。 *女性(男性)として自分らしく生きてゆくことは、現実社会の中では難しいだろうと思う。	現実社会での性別因子
一致一貫的性同一性	自己一貫的性同一性 *過去において、自分の性別に自信が持てなくなったことがある。 *過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。 *いつからか自分の性別が分からなくなってしまったような気がする。 *今のままでは次第に自分の性別が分からなくなっていくような気がする。 *自分の性別に迷いを感じることもある。	過去の心の性別因子
	他者一致的性同一性 *人に見られている自分お性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。 *女性(男性)としての自分は、人には理解されないだろう。 *人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。	人前での性別因子

*は逆転項目

まず、相関係数を算出した(表6)。その結果、「対自己領域」については、「現在の心の性別因子」と「現実社会での性別因子」と

の間に関連があることが分かった。「対他者領域」では、全ての下位因子において関連が示された。

表6 一般群・TG群合体データにおけるGIS 4因子と自己肯定意識尺度「対自己領域」全体・「対他者領域」全体の相関 (N=178)

	現在の心の性別因子	過去の心の性別因子	現在社会での性別因子	人前での性別因子
「対自己領域」	0.44***	0.02	0.39***	0.06
「対他者領域」	0.32***	0.28***	0.37***	0.29***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

2)重回帰分析

GISの下位因子を独立変数とし、自己肯定意識尺度得点を従属変数として重回帰分析を行った(表7)。その結果、自己肯定意識の「対自己領域」全体($R^2=0.22$, $p<.001$)のみに、「現在の心の性別因子」だけが深く

影響を及ぼしているということが明らかになった($\beta=0.34$, $p<.01$)。したがって、過去の心の性別の状態ではなく、現在の心の性別についての一貫性・安定性が自己肯定意識の「対自己領域」全体に影響していることが明らかになった。

表7 一般群・TG群合体データにおける自己肯定意識尺度
「対自己領域」全体・「対他者領域」全体に対してGIS4因子が及ぼす影響(N=178)

	「対自己領域」	「対他者領域」
	β	β
現在の心の性別因子	0.34**	0.11
過去の心の性別因子	-0.18	0.08
現在社会での性別因子	0.02	0.21
人前での性別因子	0.00	0.10
R2	0.22***	0.16***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$ β : 標準偏回帰係数

3)一般群とTG群のGISの下位因子の比較

一般群とTG群において、GISの下位因子についてのt検定を行った。「過去の心の性別因子」($t(176)=11.89$, $p<.001$)、「現実社会での性別因子」($t(176)=2.83$, $p<.01$),

人前での性別因子($t(176)=11.16$, $p<.001$)について一般群のほうがTG群より有意に高い得点を示した。「現在の心の性別因子」($t(176)=1.49$, n.s.)については、一般群とTG群の得点差は有意ではなかった。(図10)

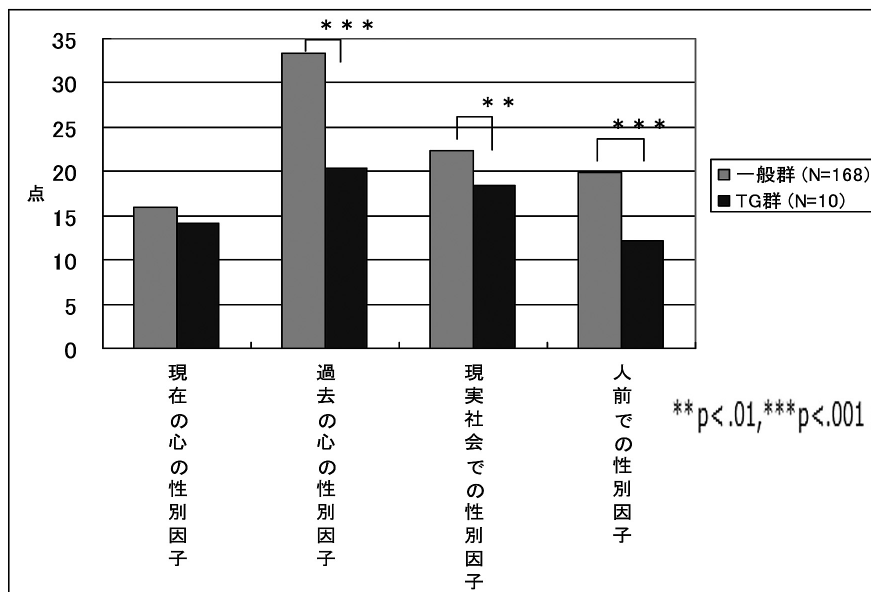


図10 一般群とTG群におけるGIS4因子の平均得点

VI 総合考察

1. 仮説I

ジェンダー・アイデンティティの状態によって、必ずしも自己肯定意識の状態は左右されない。

1)①性別の3要素が一致していないことが、必ずしも自己肯定意識の低さに結びつかない。

一般群とTG群の比較において、一般群のほうがTG群より有意に高い得点を示した自己肯定意識尺度の下位成分は「自己表明・対人的積極性」のみしか示されなかった。また、「自己現実的態度」、「對自己領域」については、TG群のほうが一般群より有意に高い得点を示した。性別の3要素の一致していないTG群の自己肯定意識の高い部分が明らかになった。したがって、性別の3要素が一致していないことが、必ずしも自己肯定意識の低さに結びつかないという、仮説Iの①は支持された。

2)②総合的な自分の性別へのアイデンティティの感覚が強いことが、必ずしも自己肯定意識の高さに結びつかない。

総合的な自分の性別へのアイデンティティの感覚が強いことと、自己肯定意識の状態との関連を検討するため、「心の性別因子」と「社会的な性別因子」のどちらの得点も高い群(GI高群)と、どちらの得点も低い群(GI低群)について比較検討を行った。

一般群内の比較では、以下のような結果になった。GI高群のほうがGI低群に比べ、自己肯定意識尺度の下位成分の得点は(「被評価意識・対人緊張」一点数が高いほど、この傾向が低いことを示す—以外の)、ほとんどの場合、有意に高い得点を示した。

総合的な自分の性別へのアイデンティティの感覚が強いことが、対人緊張しないことと、人からの評価を気にしすぎないことにはつながらなかった。しかし、それ以外に関しては、総合的な自分の性別へのアイデンティティの感覚が強ければ、自己評価を肯定的に行うことや社会的に適応した人とのかかわりを築くことが出来ることが明らかになった。

TG群内の比較では、逆に、「自己閉鎖性・人間不信」(点数が高いほど、この傾向が低いことを示す。)の得点のみ、GI高群のほうがGI低群よりも有意に高い得点を示した。TG群内では、一般群内での比較のように、自己肯定意識尺度の下位成分のほとんどと有意な得点差はなく、ただ1つの下位成分のみに有意な得点差が示された。しかし、総合的な自分の性別へのアイデンティティの感覚が強ければ、オープンに人と接することや、人間不信さが少ないことにつながるという結果になった。

一般群とTG群それぞれについてのGI高群・低群の比較結果から、総合的な自分の性別へのアイデンティティの感覚が強ければ、オープンに人と接することや人間不信さが少ないことに結びつくということが考えられるのではないだろうか。TG群について一般群よりも有意な得点差が出た箇所が少ないという結果は、GISの合計得点が一般群に比べて低い中で、高群・低群の2群に分けたため、有意差が示されなかった可能性が考えられうる。したがって、一般群内の比較のみにおいて、仮説IIの検討を行うことも可能であると考えられる。総合的な自分の性別へのアイデンティティの感覚の強さと自己肯定意識の高さととの間に

は、ほぼ有意な得点差が示されたため、総合的な自分の性別へのアイデンティティの感覚が強いことが、ほとんどの場合、自己肯定意識の高さに結びつくということとなり仮説Ⅰの②は棄却された。

しかし、仮説Ⅰの①で述べたように、GISの得点が一般群よりも全体的に低いTG群の自己肯定意識について、一般群よりも有意に高いとされる部分が示された。したがって、仮説Ⅰの②も支持されたといえる。

また、一般群のGI低群のほうがTG群よりもGISの得点が高く、総合的な自分の性別についてのアイデンティティの感覚が高いといえる。しかし、一般群のGI低群とTG群について自己肯定意識の状態を比較すると、TG群の方が一般群のGI低群より、「自己現実的態度」、「充実感」、「対自己領域」において有意に高い得点を示した。

以上の結果より、総合的に考察すると、総合的な自分の性別へのアイデンティティの感覚が強いことが、必ずしも自己肯定意識の高さに結びつかないという仮説Ⅰの②は支持されたといえるだろう。

2. 仮説Ⅱ

性別の3要素の一致性よりも心の性別の一貫性が、自己肯定意識の高さに関係する。

「心の性別因子」と「社会的な性別因子」から自己肯定意識への影響を考えた場合には、「社会的な性別因子」から自己肯定意識に対する弱い影響が見られた。「心の性別因子」から自己肯定意識に対する影響は見られなかった。したがって、心の性別の一貫性よりも社会的な性別の一貫性のほうが、自己肯定意識の高さには関係してくる

という結果が示された。以上の結果から、仮説Ⅱは棄却された。

しかし、GISの下位因子(4因子の状態)に戻し検討を行った場合には、「社会的な性別因子」の下位因子であった「人前での性別因子」と「現実社会での性別因子」から自己肯定意識に対する影響は見出されなかった。その代わり、「現在の心の性別因子」から自己肯定意識尺度の「対自己領域」全体に対する(「社会的な性別因子」からのものよりも強い)影響が明らかになった。また、一般群とTG群でGISの下位因子について比較してみると、「現在の心の性別因子」においてのみ、両群の得点差は有意ではなかった。

図11は、「対自己領域」全体と「過去の心の性別因子」、「対自己領域」全体と「現在の性別因子」の散布図である。TG群は、「過去の性別因子」が低く、下部に固まっているが、「対自己領域」の得点は高いことが分かる。ところが、図12では、TG群の「現在の心の性別因子」の得点は上がり、TG群も一般群に混ざりこむように、上部に移行している形となっていることが分かる。

以上の結果から、性別の3要素が一致していないTG群の自己肯定意識の「対自己領域」の高さは、現在の心の性別の安定性・一貫性によるものだと考えることが出来る。

本研究では、心の性別の一貫性が自己肯定意識の高さを保つ上で、重要であると考えてきた。しかし、過去の心の性別は関係なく、現在どのように自分の性別を受け止めているかということが、自己肯定意識の特に、自分自身を肯定的に受け止めることに対して関係していることが明らかになった。

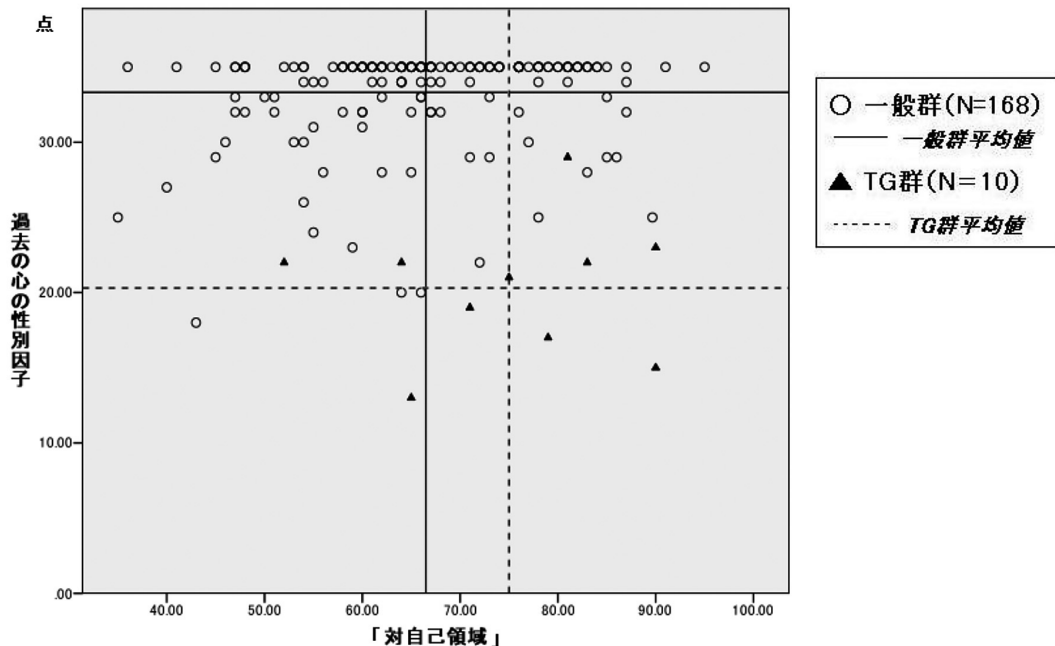


図11 一般群とTG群におけるGIS「過去の心の性別因子」と自己肯定意識尺度「対自己領域」の得点

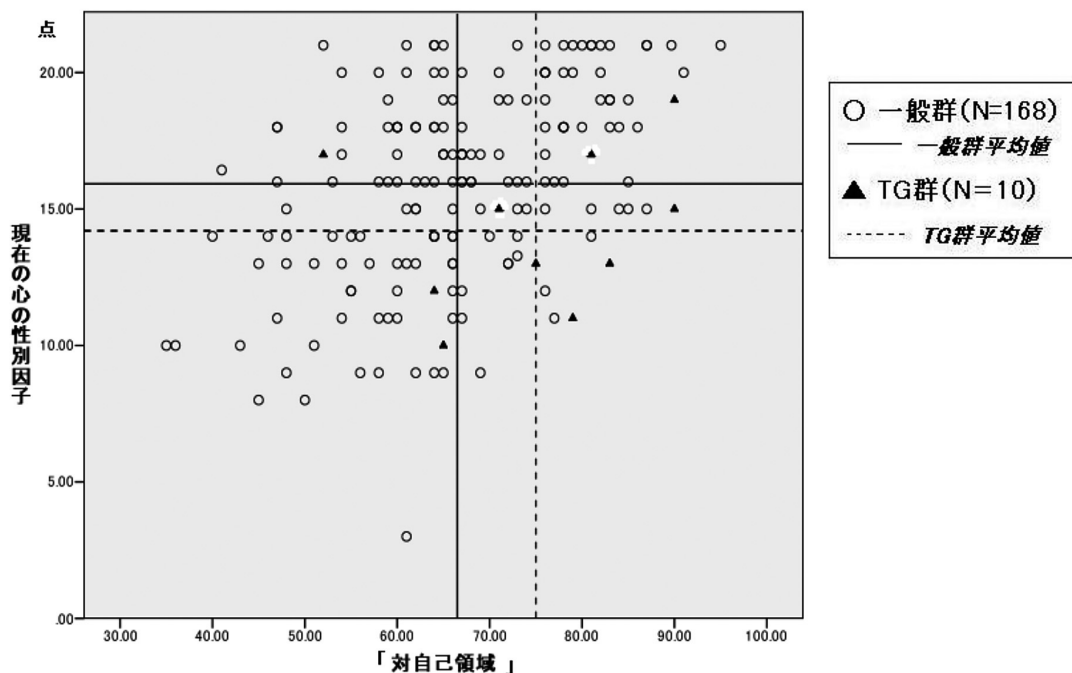


図12 一般群とTG群におけるGIS「現在の心の性別因子」と自己肯定意識尺度「対自己領域」の得点

GISの下位因子の相関関係を検討したところ、「対自己領域」全体について、「過去の性別因子」との間には有意な正の相関関係は見出されなかったが、「現在の心の性別因子」との間には有意な正の相関関係が見出された。このことから、やはり、現在の心の性別の状態が重要であり、自己肯定意識の、特に、自己に関する部分について関係していることが示唆されたといえよう。

また、自己肯定意識尺度における「充実感」では、一般群とTG群を比べた場合には有意差が示されなかったが、一般群のGI低群とTG群と比べた場合には有意差が示された。つまり、一般群のGI低群は、性別の3要素が一致していると感じているが、性別の3要素が一致していないTG群よりも「充実感」の得点が低いという結果になった。この背景には、TG群は、自分の性別についてのなんらかの違和感を自覚しているため、違和感を抱えている自分を受け入れてくれる誰かを求めたり、他者に打ち明けたりするという可能性が大いに考えられる。一方で、一般群のGI低群の人は、自分の性別に対する感覚が弱く、安定していなかったとしても、TG群のような行動をとる人は少ないだろう。そのため、TG群は、現実社会においても、充実感を持ち、将来についても前向きに考え、自分を肯定的に捉えることができるのかもしれない。

3. 仮説Ⅲ

仮説Ⅱはトランスジェンダーにおいても同様の傾向が見られる。

仮説Ⅱについて、ジェンダー・アイデンティティの下位概念が自己肯定意識に与える影響を検討する際に、TG群が10名と少数だったため、一般群・TG群合体データ

により検討した。そのため、トランスジェンダーにおいて、性別の3要素の一致性よりも心の性別の一貫性が、自己肯定意識の高さに関係するということが、信頼性にかけるかもしれない。

しかし、一般群よりもTG群のほうが、自己肯定意識の平均得点の高い部分が明らかになった。また、GISの下位因子の中では、「現在の心の性別因子」の得点のみ、一般群との間に有意な得点差がないことも明らかになった。一般群・TG群合体データにおける検討ではあるが、「現在の性別因子」から「対自己領域」への影響が示されたのは明らかである。心の性別と単に総合的に捉えるのではなく、(過去の性別と対比させ、)「現在の心の性別因子」について注目するとき、「現在の心の性別因子」から、TG群の自己肯定意識の高い部分への影響が見えてくるのではないだろうか。上記の結果から仮説Ⅱは支持されないが、性別の3要素の一致性よりも現在の心の性別の一貫性が、自己肯定意識の高さに関係するということがトランスジェンダーにおいても支持されたといえよう。

トランスジェンダーにおいても、自分が社会の中で自分の性別を安定して感じることができること(社会的な性別因子の合計得点の高さ)と、自己閉鎖的でなく、対人緊張せずに、オープンに人と接することに、高い関係性があることが明らかになった。また、総合的なジェンダー・アイデンティティの感覚の強さ(GISの合計得点の高さ)と、人からの評価についてあまり気にしなかったり、対人緊張しなかったりという部分についても関係があるということが示された。

TG群内のGI高群と低群の比較においても、GI低群よりもGI高群のほうが、「自己閉鎖性・人間不信」(点数が高いほど、この傾向が低いことを示す。)の得点において、有意に高い得点を示した。したがって、トランスジェンダーにおいて、ジェンダー・アイデンティティの感覚が強ければ、オープンに人と接することや、人間不信さが少ないことにつながるということが明らかになった。

一般群とTG群で比較すると「過去の心の性別因子」についての得点差が一番大きいことから、トランスジェンダーがこれまで抱えていた、性別についての葛藤、苦しみや辛さなどが見えてくるかもしれない。一般群のGI低群よりもTG群は、過去においてトランスジェンダーは自身の性別について悩み苦しみ不安定さを持っていることには変わらない。しかし、TG群の「現在の心の性別因子」の得点は、一般群と変わらなかった。現在、自分の性別について一貫性した強い感覚を持っており、将来においても自身の性別について安定した感覚を持っているということが分かる。

Ⅶ 今後の展望

本研究では、性別の3要素が一致していない人々、トランスジェンダーの人の自己肯定意識、特に「対自己領域」の高さが明らかになった。トランスジェンダー当事者に、自己肯定意識の高い部分と低い部分が示された本結果についてどう思うか、直の声を聞くためのインタビュー調査を行うことも今後の課題であるといえる。また、どのような人とのかわかりが自己肯定意識の更なる向上につながるのかという研究も、トランスジェンダーについて考える上で重要となってくるのではないだろうか。

トランスジェンダーのように性別の3要素が一致していなくとも、現在の心の性別が安定・一貫していれば、自己を肯定的に捉えることにつながっていくということが示された。これは、トランスジェンダーを捉える上で、展望が持てる結果を示したのではないだろうか。性別の3要素が一致していないために、悩み苦しむ、辛い経験をしてきたとしても、結果として、支えてくれる人・理解してくれる人を見出したり、現在の心の性別に対する感覚が安定してきたり、将来についても同じ自分の思う性別を望むことができたりすることが、自分自身を肯定的に捉えることにつながっていくと推測されたのである。今後、トランスジェンダーの人の自己肯定意識の更なる向上のために、どのような働きかけが有効か、より現実的に、より具体的に明らかにしていくことが必要であると考えられる。

〈付記〉本研究をまとめるにあたり、ご指導いただきました遠山尚孝先生に心から感謝いたします。多大なる御助言をいただきました佐々木掌子さん、ならびに調査に御協力くださった大学関係者の皆様、トランスジェンダー当事者の方々に深く感謝申し上げます。

文献

文献

- 秋山俊夫・坂井修一(1986)：身体像に関する研究—青年期女性の性同一性を中心にして— 福岡教育大学紀要, **36**, 151-160.
- Bem,S.L.(1974)：The measurement of

- psychological androgyny. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Crocker, J. & Major, B. (1989) : Social stigma and self-esteem: the self-protective properties of stigma. *Psychological Review*, 96, 608-630.
- 土肥伊都子(1996) : ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教育心理学研究, 44(2), 187-194.
- 遠藤辰雄(1992) : セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求 蘭千寿・井上祥治(編). ナカニシヤ出版.
- 古橋忠晃(2008) : 「自分は性同一性障害である」という主張で受診した男性の「反対の性」のあり方について—中核群と周辺群の病態の差異の考察を通して— 臨床精神病理, 29, 227-251.
- 平石賢二(1990) : 青年期における自己意識の発達に関する研究(I) —自己肯定性次元と自己安定性次元の検討— 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, 37, 217-234.
- 平石賢二(1993) : 青年期における自己意識の発達に関する研究(II) —重要な他者からの評価との関連— 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, 40, 99-125.
- 石丸径一郎(2004) : 性的マイノリティにおける自尊心維持—他者からの受容感という観点から— 心理学研究, 75(3), 191-198.
- 野宮亜紀・針間克乙・大島俊之・原科孝雄・虎井まさ衛・内島豊(2003) : プロブレムQ&A性同一性障害って何? [一人一人の性のありようを大切にすため
に] 緑風出版.
- 佐々木掌子(2007) : ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 パーソナリティ研究, 15(3), 251-265.
- 富重 健一・川端 佳奈子(1999) : 青年期男子・女子の身体満足度と劣等感・自己受容感の関連 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 385.

